水と文学（3）

前東京都水道局理事　小泉　智和

長野県の田中知事の脱ダム宣言で、ダム建設のあり様が全国的に問われています。

しかしして、ダム建設は、今に問われる問題ではなく、古くからの問題なのです。

石川達三の「日陰の村」は、戦前の昭和12年に書かれたもので、当時社会問題化した東京の水源地候補地としての小河内村を取り扱ったものです。

やがては湖底の村になるであろう小河内村の悲哀を描いたもので、村民の側に立って、行政や都会の住民に意見を求める告発本です。それだけにこの本は、刊行に際し、おびただしい伏字、削除がなされました。伏字が復元されたのは、戦後の昭和23年のことでした。

石川達三の経歴

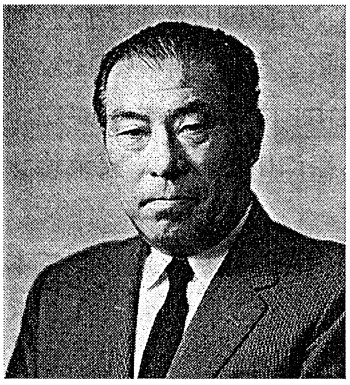
達三は、明治38年秋田県横手町に生まれました。教師である父の転勤都合で、秋田市、更に岡山県高梁（たかはし）町に移転します。岡山の関西中学校卒業後、上京して早稲田大学第２高等学院を卒業、学費がないため進学をあきらめていた処、「大阪朝日新聞」の懸賞小説に当選、当選金を得て早稲田大学文学部に進学します。しかし、学資が続かず翌年の昭和３年に中退して、実業雑誌社に入社します。

昭和７年、雑誌社を退社して本格的執筆活動に入り、昭和10年、「蒼氓（そうぼう）」で第一回芥川賞を受賞します。しかし、文壇の地位を確固たるものにしたのは、「日陰の村」でありました。彼は、「日陰の村に対する批評の当否は別として、ともかく私に作家としての安定した地位があたえられたのは、このころからであったらしい。私は32歳。芥川賞をいただいてから満２年ののちのことであった」と、晩年に語っています。

「日陰の村」を書いた翌年、「生きている兵隊」を発表しますが、即日販売停止、新聞紙発行違反に問われ、禁錮４ヶ月・執行猶予３年の判決を受けます。太平洋戦争勃発後は、海軍報道部に所属して、検閲削除を受けながらも数々の作品を発表します。戦後、「風にそよぐ葦」、「48歳の抵抗」、「人間の壁」、「金環蝕」などを発表、昭和44年には、社会派

文学への積年の努力と功績によって、菊池寛賞を受賞しています。達三は、左翼からは戦争協力者と言われ、右翼からはアカ呼ばわりをされました。そんな彼は昭和60年に逝去、79歳でした。

彼の著作は、行動的なルポルタージュ風な作品が多く、常に社会的なテーマを追及し、そして積極的に社会的発言をしていく形をとっているのが特徴です。



石川達三

日陰の村

著作の中で、「御覧なさい、下の方はもう日がかげって来た。朝は十時にならなくては日が当らないし、午後は三時になるともう山の向こうに日が落ちてしまう。一日にたった五時間しか日が当たらない。僕は自分ひとりでこの村に日陰の村という名をつけているんです。この名前には別の象徴的な意味もあるんです。つまり東京という大都市が発展して行く、すると大木の日陰にある草が枯れていくように小河内は発展する東京の犠牲になって枯れて行くのです。山の日陰にいる間はまだよかった。都会の日陰になってしまうと村はもう駄目なんです」と、軍隊入営前の村長の息子が思いを寄せる娘に語りかけます。

工事着手は、昭和13年で、昭和５年の立案調査から８年が経過していました。

その後、準備工事に入りましたが、戦争で中断。貯水池用地内の物件移転は、戦後の昭和26年からで、東京府小河内村、山梨県丹波山村・小菅村の三村にまたがる954戸（戦前は649戸であったが、疎開からの帰還や工事関係者の引き続く居住等で増加した）の村人は、ある者はずり上がって急斜面に移転し、ある者は青梅・昭島・立川方面へ、そして一部のグループは新天地を求めて八ヶ岳山麓へ、ちりじりに移転していきました。

東海林太郎が歌って流行した「湖底の故郷」の歌詞です。

夕陽は赤し身は悲し
涙は熱く頬濡らす
さらば湖底のわが村よ
幼き夢の揺篭よ

小河内貯水池反対ビラ
（佐藤孝太郎著「東京と三多摩」より）

小河内ダムの光と影

戦争により中止されていたダム建設

は、昭和23年工事再開、そして昭和32年、小河内ダムは完成します。有効貯水量18,540万m^3、水道専用ダムとしては日本一のダムです。

完成までには78名もの多くの人が亡くなりました。急峻な山に囲まれ、冬ともなれば雪に覆われる地です。

ダム工事の鍬入れにあたっては、最後の町奴＝侠客といわれた飛田東山（高倉健演ずる唐獅子牡丹のモデル）が前科者を多く含む300名の労務者をかき集めて乗り込みます。しかし、市会、新聞等での反対に会い、最終的には下山して行きます。厳寒の地、ある面では、こうでもしなければ人が集まらなかった、あるいは人入れ稼業を生業とする人々がダム工事に群がり跋扈していたのです。

ともあれ、小河内が出来て、これで一安心、誰もがそう思いました。

しかし、昭和39年の東京オリンピックを前にして、大渇水のため小河内貯水池は空っぽになります。報道は、「小河内ダム」を「しょうがないダム」と読んで、揶揄します。

東京は砂漠と化して、応急給水に自衛隊が出動、「オリンピックは開催できないのではないか？」と、ささやかれ始めました。そんな時、時の建設大臣河野一郎は叫びます。「利根川から水を引け！」。鶴の一声、利根川からの緊急導水が始まりました。

それから40年、利根川上流に矢木沢、下久保、草木といったダムが出来、今日東京の水は、その80％を利根川に依存しています。

小河内貯水池

蛇口の向こうを考える

市民が安心して生活するためには、水が安定的に供給されることが何よりも大切です。

そのために、多くのダムが建設されてきたのは事実です。

また、そのために先祖伝来の住みなれた土地、愛する村を離れざるをえなっかた多くの人々がいたのも事実です。石川達三の「日陰の村」は、正にこの事を強く訴えているのです。

毎日何気なく使っている水道ですが、今一度蛇口の向こうを考えることが必要だと思います。

「飲水思源」。……水を飲む時は、その源のことを思い、感謝しなければならない……明国から亡命帰化した、江戸時代の儒者・朱舜水が、昔々から訴えています。